



第131号

2019年10月15日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33



学部卒業生の現状と課題

同窓会副会長 八木 雅之
(S44・3卒)

同窓会編集委員会より難しい課題を提示されてしまった。任にあらずということはわかっているが、昨年まで一緒に仕事をしていた仲間からの依頼では断りにくい。開き直って稿に向かうことにした。それゆえ、見間違いや解釈の誤りもあるが御容赦いただきたい。

会報百十四号(二〇一一年六月発行)に当時の上杉副会長が、「正規教員になるなら千葉大学教育学部に」と題して寄稿している。内容は卒業生の採用率が日本一になったというものだ。数値は51・1%、おおよそ二人に一人の割合である。加えて、教員就職率(臨時的任用を含む)は65・8%、卒業生の三人に二人が教職の道を選んだといっている。

下段に最近五年間の採用状況を示す表を掲載した。これに拠れば、上杉教授の示された数値、50%が維持されている。我が国の教員養成学部の中では、トップレベルを維持して

いるといっている。学部の充実ぶり、教授陣の指導の的確さを示しており、OBの一人として嬉しく思うと同時に、心から敬意を表するものである。

ところで、この「50%」という数値について考えてみたい。同窓生の中でも大先輩にあたる皆様にとつては、卒業と同時に教職に身を置くのが当然であった。同窓生意識も強いものがある。互いに助け合い励まし合って、厳しい時代を生抜いてこられた自負もある。この数値で日本一か、との思いも当然あるはずだ。

また、現職の同窓生の皆様にとつては、世代交代による大量採用(千葉県の昨年度募集人数は、小中高等で千六百四十名余である)時代の今、後輩諸君に同職場で出会う確率は低く、寂しい思いもしているだろう。このように思うと、更なる数値の向上を願わざるを得ないが、ここは冷静に考える必要もあるだろう。

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいきだより	4・5面
私の学園生活	7面
私の趣味アラカルト	8面
臨海実習所	8面
読者の声	9面
支部だより	9面
定期総会と表彰者の紹介	10面
受賞者からのメッセージ	11面
本年度の経常予算と	
役員一覧	11面
教育学部創立150周年事業から	12面
物故会員	12面

二つ指摘してみたい。

一つ目は、多様性が尊重される現代にあつて、学部卒業生が教員のみを目指すだけでよいのか、という課題である。会報の特別寄稿等でも拝読しているが、教職以外の道に進まれた方々の豊かな人生模様に感心させられる。そして、その背後に学部で育ったことを誇りに思う気持ちが含まれていることに気付く。「教育」は子供たちだけのものではない。むしろ、もっと広がってもよいのではと思う気持ちもある。

二つ目は、本来の教員志望を持つ後輩諸君をどうサポートしていくかである。教員を目指し、本学部に入學した人たちの夢を実現させるべく、我々同窓生ができることは何かである。現在、サポートルームにおける援助、採用選考対策講座の開催等、側面からの支援を怠りなく実施している。その効果も徐々にではあるが現れてきているようだ。また、間近に迫った百五十周年記念事業の中心に教員養成支援を挙げている。中身は、基礎教師力向上セミナー、

卒業生の就職状況(最近5年間)

(平成30.5.1現在)

区分 年度 (平成)	教員		教員外		その他 (進学・未就職)		合計
	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	
25	248	55.2	128	28.4	74	16.4	450
26	247	52.5	133	28.2	91	19.3	471
27	249	54.2	151	32.8	60	13.0	460
28	230	51.5	123	27.5	94	21.0	447
29	228	50.4	146	32.2	79	17.4	453

出典 「教育学部要覧2018」より筆者作成

学校課題対応修得セミナー等(いずれも仮称)、学校現場の課題に即戦力として対応できる教員を送り出したいからだ。そのことで、本学出身の教員が教育界に貢献できれば、これに勝る喜びはない。

数値は冷厳である。しかし、日々怠りなくできることを努めていけば結果もついてこよう。同窓生の温かい視線が、後進を育てるのだということを肝に銘じてやっていきたい。同窓生各位の御支援・御鞭撻を心からお願いして稿を閉じることとする。

特別寄稿



途上国の教育実状から

株式会社さくら社 代表取締役社長

横山 駿也
(S 52・3卒 千葉市)

六年ほど前の秋のこと。とある
ご縁から、アフリカの途上国の教
育に関心はないかとメールをいた
だいた。それがきっかけとなり、
それ以降、出会う方々からアフリ
カや南米などの小学校の様子を伺
う機会が増えていった。中には日
本の学校現場では考えられない内
容もあり、少しずつではあるが途
上国の教育現場における実情が見
えてきた。その一端を紹介したい
と思う。

まずは、アフリカのニジェールで中学校の先生が生徒たちに語った話。

「大きな木の下で一晩寝ると死ぬよ」。

なんとも信じがたい話だが、先生は真剣に話している。その理由は、野生の動物に襲われることでも、毒のある蛇や虫に食われることでもない。立派な理科の学習理論として語るといふ。

「植物は日中、光合成をして酸素

を出しているが、夜は呼吸だけに
なり、二酸化炭素を出している。
その二酸化炭素は空気よりも重
いため、下に沈んでいく。

よって、一晚、大きな木の下で寝ていると、寝ている間に二酸化炭素が下からたまり、呼吸ができなくなり死んでしまうんだ」。

とまあ、こんな話だ。確かに理屈は通っている。しかし、どう考えても起こり得ない話だ。

どうして、このようなことになつてしまふのか、この話を教えてくれた海外協力に従事する理数科教育の専門家が聞かせてくれた。

ニジェールの小学校には理科室が無く、理科の実験は中学に進学してからとなっている。そのため、小学校の理科は教科書から知識を学ぶ程度で、実験をして確かめるという学習が無い。そういった環境で学んだ生徒が先生になつて、知識先行の授業が続いているのではないかと話してくれた。

次は、アフリカのルワンダでの計算の話。

ルワンダでも、一年生で一桁の数の計算を学んでいる。ただ、そのやり方が日本では全く見かけないやり方になっている。

3 + 4 = 11と問題が出たら、日本の子はすぐに7と書くが、ルワンダの子は写真のように○を書き、

時間がかかっている。

その○の数を書き加えてから答えを書いている。そのため、一問一問に

7. Add

○ (1)	$\begin{array}{r} 2 \\ 00 \end{array}$	+	$\begin{array}{r} 1 \\ 0 \end{array}$	= 3
✕ (2)	$\begin{array}{r} 4 \\ 900 \end{array}$	+	$\begin{array}{r} 0 \\ 0 \end{array}$	= 5
○ (3)	$\begin{array}{r} 3 \\ 000 \end{array}$	+	$\begin{array}{r} 4 \\ 00 \end{array}$	= 7
○ (4)	$\begin{array}{r} 7 \\ 000 \end{array}$	+	$\begin{array}{r} 3 \\ 000 \end{array}$	= 10
○ (5)	$\begin{array}{r} 7 \\ 000 \end{array}$	+	$\begin{array}{r} 6 \\ 0000 \end{array}$	= 13

8. Subtract

○ (1)	$\begin{array}{r} 3 \\ 0 \end{array}$	-	2	= 1
○ (2)	$\begin{array}{r} 5 \\ 00 \end{array}$	-	5	= 0
✕ (3)	$\begin{array}{r} 10 \\ 0000 \end{array}$	-	0	= 9
○ (4)	$\begin{array}{r} 12 \\ 0000 \end{array}$	-	3	= 9
✕ (5)	$\begin{array}{r} 17 \\ 0000 \end{array}$	-	9	= 7

一桁の加減算ならまだよいが、

8×6のようなかけ算でも同様に行っている。四十八個もの○を書いて数えてから答えるため、一問のかかけ算を答えるのに一分以上かかることもある。しかも、数える途中で数え間違いも起きている。

このようなやり方は日本でも江戸時代に行われていた。目の子算と呼ばれるやり方だ。しかしながら、そろばんや明治以降の筆

算の発達でとつくに姿を消してしまっている。

また、南米のパラグアイには3×4を13と信じてやまない小学校の先生がいて、アフリカのモロッコではかけ算九九は覚える必要はなく、「私も覚えていない」と公言する教育者もいる。

こういふ実際の姿を知ると、日本
 の教育がいかに素晴らしいもの
 であるかと痛感する。同時に、途
 上国の教育に微力ながらも協力を
 したいという思
 いも湧いて来た。
 目下、ささやか
 ではあるがアフ
 リカのルワンダ
 の算数教育に協
 力をさせていた
 だいている。



◆◆◆ 会員からのお知らせ ◆◆◆

教育学部卒
業生の野口芳
宏氏と宇佐美
寛名誉教授共
著の『教育と
授業』が「さ
くら社」から

教育と授業

宇佐美寛
野口芳宏
往復討論

授業名人
×
教育界の
最長老

リスペクトと敬意は無情が繰り返す。これが討論、
争い、喧嘩に必要で、これを欠かしてはならない。争い、喧嘩は、
（世渡り術）として必要の場だ。



本体価格二千円

「教育学部創立百五十周年記念事業会」がスタート

千葉大学教育学部は、令和四年度に創立百五十周年という大きな節目を迎えます。このことから、本年七月三日に、千葉大学教育学部の発議により、「千葉大学教育学部創立百五十周年記念事業会」が発足しました。設立にあたり、町田義昭同窓会会長が、本事業の会長に推挙されました。同時に、創立百五十周年記念事業会会則の制定と組織も編成されました。

事業の概要と組織は次の通りです。

(目的)

創立百五十周年の節目の年を記念し、千葉大学教育学部の百五十年にわたる歴史を振り返り、その業績を顕彰して後世に引き継ぐとともに、教員養成支援に必要な事業を展開することを目的とする。

(事業の内容)

- 一 教育学部創立百五十周年記念シンポジウム及び式典の開催
- 二 記念映像の建立
- 三 教育学部の歴史展望壁面ギャラリーの設置

四 教育学部創立百五十周年記念誌の発行

五 教員養成支援事業(多角的な対策講座等の開催)

(組織の概略)

常任理事会(顧問・会長・副会長・常任理事)

幹事会(教育学部推進委員・同窓会役員・後援会役員・学生代表)

事業推進委員会(①記念式典部会②記念碑部会③ギャラリー部会④記念誌部会⑤教員養成支援部会⑥広報部会⑦募金部会)

※事業推進委員会には、教育学部同窓会各支部から推薦された推進委員全員(七十四名)が七つの部会のいずれかに属し、学部の方々と共に事業推進委員として活動します。

なお、前号に掲載したように、事業の内、記念誌部会は先行して、大塚昌男委員長の下十二名で、同窓会誌編集委員会が活動しています。

また、七月二十日(土)には、同窓会の事業推進委員が一堂に会し、記念事業の概要を確認しました。

◎周年事業に伴う御寄付のお願い

同窓会員におかれましては、この記念事業の趣旨をお汲み取り頂き、御寄付をお願いいたします。事業の円滑な実施に向けて、そして、新たな飛躍を目指す教育学部に御支援を賜りますようお願いいたします。

(寄付目標額) 五千万円

(寄付募集期間) 令和元年十二月から令和四年九月末迄

(募集について)

個人 一口五千元。

できれば二口以上
法人 一口一万円。

できれば十口以上

(募金要領・払込方法)

千葉大学SEEDS(シーズ)基金を通じてお支払いいただきます。同基金の払込票で、寄付目的の使途を指定することにより、本事業に寄付されます。詳細は、今後送付される、「創立百五十周年記念事業御寄付のお願い」をご覧ください。

(文責 事務局次長 水野平吾)

百五十周年記念事業

記念誌編集委員会からのお願い

記念誌作成・編集から千葉大学教育学部同窓会に関する写真や資料等をお持ちの方は事務局へ御連絡ください。

編★集★後★記

「今回も、多彩で内容が素晴らしいですね。」
本号第一回目の編集委員会開始前の委員たちの感動の声である。

さつそく、巻頭言より編集を始める。数値の読み解きと発想の転換に大いに刺激される。どの玉稿にも、感動・感服のつぶやきを漏らしながらの校正作業。

今回の特別寄稿は、元小学校教諭で、現在は教育ソフトウェア社を経営されている横山駿也さんをお願いした。この玉稿を読まなければ、アフリカの途上国の教育実情を知り得なかった。教育支援に頭が下がる。

ところで、百二十九号から、『紙面紹介』欄を、一面右下に載せているのにお気づきだろうか。これが、なかなか好評である。

本号の八面には、臨海実習所の取材記事を書いた。「まだ、利用されているのか」と、驚く方も多いに違いない。

今後も、読みやすい紙面作りに努力し、会員の関心に応え、会員同士の交流と繋がりが深まるような広報をお届けしたい。(文責 宮葉清子)